大衆文学大系

中里介山

大菩薩峠（抄）

大衆文学大系

監修＝大佛次郎　川口松太郎　木村毅

講談社

4

中里介山

大衆文学大系4　中里介山集
昭和四十七年九月二十日　第一刷

著者　中里介山
装幀者　田中一光
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　二八〇〇円
©中里スミ　一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0393-136046-2253 (0)　(文2)

目次

中里介山集
大菩薩峠　五
解説　八二九
解題　八四三
年譜　八四五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

中里介山集

大菩薩峠

甲源一刀流の巻

一

大菩薩峠は江戸を西に距る三十里、甲州裏街道が甲斐国東山梨郡萩原村に入って、その最も高く最も険しきところ、上下八里にまたがる難所がそれです。

標高六千四百尺、昔、貴き聖が、この嶺の頂きに立って、東に落つる水も清かれ、西に落つる水も清かれと祈って、菩薩の像を埋めて置いた、それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いずれも流れの末永く人を湿おし田を実らすと申し伝えられてあります。

江戸を出て、武州八王子の宿から小仏、笹子の険を越えて甲府へ出る、それがいわゆる甲州街道で、一方に新宿の追分を右にとって往くこと十三里、武州青梅の宿へ出て、それから山の中を甲斐の石和へ出る、これがいわゆる甲州裏街道（一名は青梅街道）であります。

青梅から十六里、その甲州裏街道第一の難所たる大菩薩峠は、記録によれば、古代に日本武尊、中世に日蓮上人の遊跡があり、降って慶応の頃、海老蔵、小団次などの役者が甲府へ乗り込む時、本街道の郡内あたりは人気が悪く、ゆすられることを怖れてワザワザこの峠へ廻ったということです。人気の険悪は山道の険悪よりなお悪いと見える。それで人の上り煩う所は春もまた上り煩うと見え、峠の上はいま新緑の中に桜の花が真盛りです。

「上野原へ、盗人が入りましたそうでがす」

「へエ、上野原へ盗人が……」

「それがはや、お陣屋へ入ったというでがすから驚くでがす」

「驚いたなあ、お陣屋へ盗賊が……どうしてまあ、このごろのように盗賊が流行ることやら」

妙見の社の縁に腰をかけて話し込んでいるのは老人と若い男です。この両人は別に怪しいものではない、このあたりの山里に住んで、木も伐れば焼畑も作るという人たちであります。

これらの人は、この妙見の社を市場として一種の奇妙なる物々交換を行う。

萩原から米を持って来て、妙見の社へ置いて帰ると、数日を経て小菅から炭を持って来て、そこに置き、さきに置いてあった萩原の米を持って帰る。萩原は甲斐を代表し、小菅は武蔵を代表する。小菅が海を代表して魚塩を運ぶことがあっても、萩原はいつでも山のものです。もしもそれらの荷物を置きばなしにして冬を越すことがあっても、なくなる気づかいはない——大菩薩峠は甲斐と武蔵の事実上の国境であります。

右の両人は、この近まわりに盗賊のはやることを話し合っていたが結局、

「どろぼうが怖いのは、物持の衆のことよ、こちと等が家はどろぼうの方で怖れて逃げるわ」

ということに落ちて、笑って立とうとする時に、峠の道の武州路の方から青葉の茂みをわけて登り来る人影があります。

「あ、人が来る、お武家様見たようだ」

二人は少しあわて気味で、炭俵や糸革袋が結びつけられた背負梯子へ両手を突込んでいま登り来るという武家の眼をのがれるもののように、社の裏路を黄金沢の方へ切れてしまいます。

二

程なく武州路の方からここへ登って来たのは、彼等両人が認めた通り、一個の武士でありました。黒の着流しで、定紋は放れ駒、博多の帯を締めて、朱微塵、海老鞘の刀脇差をさし、羽織はつけず、脚絆草鞋もつけず、この険しい道を、素足に下駄穿でサッサッと登りつめて、今頂上の見晴らしのよいところへ来て、深い編笠をかたげて、甲州路の方を見廻しました。

歳は三十の前後、細面で色は白く、身は痩せているが骨格は冴えています。この若い武士が峠の上に立つと、ゴーッと、青嵐が崩れる。谷から峰へ吹き上げるうら葉が、海の浪がしらを見るようにさわ立つ。そこへ何か知らん、寄せ来る波で岸へ打ち上げられたように飛び出して来た小動物があります。

妙見の社の上にかぶさった栗の大木の上に固まって、武士の方を見つめては時々白い歯を剝いてキャッキャッと啼く。その数、十四ほど、ここの名物の猿であります。

柳沢峠が開けてから後の大菩薩峠というものは、全く廃道同様になってしまいましたけれど、今日でも通れば通れないことはないのです。そこを通って猿に出くわすことは珍らしいことではないが、それを珍らしがって悪戯でもしかけようものなら、かえって飛んだ仕返しを食うことがあります。人の弱味を見るに上手なこの群集動物は、相手を見くびると脅迫する、敵わない時は味方を呼ぶ、味方はこの山々谷々から呼応して来るのですから、初めて通る人は全くおどかされてしまいます。

が旅に慣れた人は、その虚勢を知って自らそれに処するの道があるのであります。

右の武士は、慣れた人と見えて、一目猿を睨みつけると、猿は怖れをなして、なお高い所から、しきりに擬勢を示すのを、取り合わず峠の前後を見廻して人待ち顔です。

さりとて容易に人の来るべき路ではないのに、誰を待つのであろう、こうして小半時もたつと、木の葉の繁みを洩れて、かすかに人の声がします。その声を聞きつけると、武士はズカズカと萩原街道の方へ進んで、松の木立から身を斜めにして見おろすと、羊腸たる坂路のうねりを今しも登って来る人影は、たしかに巡礼の二人づれであります。

「お爺さん――」

よく澄んだ子供の声がします。見れば一人は年寄で半町ほど先に、それと後れて十二三ぐらいの女の子――今「お爺さん」と呼んだのは、この女の子の声でありました。

右の二人づれの巡礼の姿を認めると、何と思うてか武士は、つと妙見堂のうしろに身をかくします。木の上では従前の猿が眼を円くする。

「やれやれ頂上へ着いたわい、おゝ、ここにお堂がござる」

年寄の方の巡礼は社の前へ進んで笠の紐を解いて跪まると、

「お爺さん、ここが頂上かい」
面立の愛らしい、元気もなかなかよい子でありました。
「これからは下り一方で、日の暮までに河内泊りは楽なものだ、それから三日目の今頃は、三年ぶりでお江戸の土が踏める——さあお弁当をたべましょう」
老爺は行李を開いて竹の皮包を取り出すと、女の子は、
「お爺さん、その瓢箪をお貸しなさい、さっきこの下で水音がしましたから、それを汲んでまいりましょう」
「おゝそうだ、途中で飲んでしまったげな。お爺さんが汲んで来ましょう、お前はここで休んでおいで」
腰なる瓢箪を抜き取ると、
「いいのよ、お爺さん、あたしが汲んで来るから」
女の子は、老人の手から瓢を取って、ついこの下の沢に流るる清水を汲もうとて山路をかけ下ります。
老人は空しくそのあとを見送って、ぼんやりしていると、不意に背後から人の足音が起ります。
「老爺」
それはさいぜんの武士でありました。
「はい」
老爺は、あわただしく居ずまいを直して挨拶をしようとする時、かの武士は前後を見廻して、
「ここへ出ろ」
編笠も取らず、用事をも言わず、小手招きするので、巡礼の老爺は怖る怖る、
「はい、何ぞ御用でござりまするか」
小腰をかがめて進み寄ると、
「彼方へ向け」
この声諸共に、パッと血煙が立つと見れば、なんという無残なことでしょう、あっという間もなく、胴体全く二つになって青草の上にのめってしまいました。

三

「お爺さん、水を汲んで来てよ」
瓢箪を捧げた少女は、いそいそとかけて来たが、老人の姿の見えぬのを少しばかり不思議がって、
「お爺さんはどこへ行ったろう」
お堂の裏の方へでも行ったのかしらと、来て見ると、
「あれ——」
瓢を投げ出して縋りついたのは老人の亡骸でした。
「お爺さん、誰に殺されたの——」
亡骸をかき抱いて泣きくずれます。
ここにこの不慮の椿事を平気で高見の見物をしていたものがあります。最前の武士の一挙一動から、老人の切られて少女の泣き叫ぶ有様を目も放さずながめていたのは、かの栗の木の上の猿です。
猿共は、今や木の上からゾロゾロと下りて来ました。
老少二人の伏し倒れた周囲を遠くから取りまいて、だんだんに近寄ると、小さな奴がいきなり飛び出して、少女の頭髪にさしてあった小さな簪をちょっとツマんで引き抜き、したり顔に仲間のものに見せびらかすような身振をする。それを見た、も一つの小猿は負けない気で、少女の頭髪から櫛を抜き取って振りかざす。その間に大猿どもは、さきに老爺が開きかけた竹の皮包みの握飯を引出して口々に頬ばってしまうと、今度は落散っていた手頃の木の枝を拾って、何をするかと思えば、刀を差すような風に腰のところへ当てがい、少女の背後へ廻って抜打に——つまり最前の武士のやった通りに——その木の枝で少

女の背中をなぐりつけました。

我を忘れて泣き伏していた少女は、この不意の一撃で、

「あれ――」と飛びのいたが、気丈な子でした、直にあり合わす木の枝を拾い取って振り上げると、猿共は眼を剝き出し白い歯を突き出してキャッキャッと叫びながら、少女に飛びかかろうとして、物凄い光景になりましたが、折よくそこへ通りかかった旅の人があります。

年配は四十位で、菅笠をかぶって竪縞の風合羽を着、道中差を一本さしておりましたが、手に持っていた松明の火を振り廻すと、今まで驕っていた猿共が、急に飛び散らかって、我れ勝ちにもとの栗の大木へと馳せ上ります。

旅に慣れた証拠は、この旅人の持っている松明でわかります。大菩薩を通るものは獣類を逐うべく、松の木のヒデというところでこしらえた松明を用意します。獣類の中でも猿は殊に火を怖れるものであります。右の旅人はその松明を消しもせず、

「姉さん、怪我はなかったかね」

近く寄って見て、

「おやおや、人が斬られている！」

少女を掻き分け屍骸へ手をかけ、その斬口を検べて見て、

「よく斬ったなあ、これだけの腕前を持ってる奴が、またなんだってこんな年寄を手にかけたろう」

旅人は歎息して何をか暫らく思案していたが、やがて少女を慰め励まして、ハキハキと老爺の屍骸を押し片づけ、少女を自分の背に負うて、七ツ下りの陽を後ろにし、大菩薩峠をずんずんと武州路の方へ下りて行きます。

四

大菩薩峠を下りて東へ十二三里、武州の御岳山と多摩川を隔てて向き合ったところに、柚のよく実る沢井という村があります。この村へ入ると誰の眼にもつくのは、山を負うて、冠木門の左右に、長蛇の如く走る白壁に黒い腰をつけた塀と、それを越した入母屋風の大屋根であって、これが机竜之助の邸宅であります。

机の家は相馬の系統を引き、名に聞えた家柄であるが、それよりもいま世間に知られているのは、門を入ると左手に、九歩と五歩とに建てられた道場であります。いつでもこの道場に武者修行の五人や十人ゴロゴロしていないことはないのでありましたが、今日はまた話がやかましい。

「お聞きなされましたか、昨日とやら大菩薩に辻斬があったそうにござります」

「ナニ、大菩薩に辻斬が……」

「年老った巡礼が一人、生胴をものの見事にやられたと甲州から来た人の専らの噂でござりまする」

「やれやれ年寄の巡礼が、無残なことじゃ」

「近頃の盗人沙汰と言い、またしても辻斬、物騒千万なことでございますな」

「左様、なにしろこの街道筋は申すに及ばず、秩父熊谷から上州、野州へかけて毎日のように盗人沙汰、それでやり口が皆同じようなやり口ということでございます」

「如何にも。それほどの盗賊に罪人は一人もあがらぬとは、八州の腹切ものだ」

「それにしても、この沢井村界隈に限って、盗賊もなければ辻斬もない、これというも、つまり沢井道場の余徳であります

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な」
沢井道場で門弟食客連がこんな噂をしているのは、前段大菩薩峠の殺人の翌々日のことでありました。
「さて、道具無しの一本」
「心得たり、若先生の型を」
門弟二人が左右に分れると、
「沢井道場名代の音無しの勝負」
口上まがいで叫ぶ者がある。
沢井道場音無しの勝負というのは、ここの若先生すなわち机竜之助が一流の剣術ぶりを、そのころ剣客仲間の呼ならわしで、竹刀にあれ木剣にあれ、一足一刀の青眼に構えたまま、我が刀に相手の刀をちっとも触らせず、二寸三寸と離れて、敵の出る頭、出る頭を或いは打ち或いは突く、自流他流と、敵の強弱にかかわらず、机竜之助が相手に向う筆法は、いつでもこれで、一試合のうち一度も竹刀の音を立てさせないで終ることもあります。机竜之助の音無しの太刀先に向っては、何れの剣客も手古摺らぬはない、竜之助はこれによって負けたことは一度もないのであります。
その型をいま二人は熱心にやっていると、折柄道場の入口とは斜めに向った玄関のところで、
「頼む」
中では返事がない。
「頼みましょう」
まだ誰も返答をするものがない、そのうちに、こちらの立合は一方が焦れて小手を打ちに来るのを、得たりと一方が竹刀を頭にのせて勝負です。
「お頼み申します」
勝負が終えて気がついた門弟連が、こちらから、無遠慮に首を突き出して見ると、お供の男を一人つれて、見事に装うた若い婦人の影が植込の間からちらりと見えました。
「拙者が応対して参ろう」
今、立合をして負けた方のが、道場から母屋へつづいた廊下をスタスタと稽古着に袴のままで出てゆくと、
「安藤さん、若い女子のお客と見たら臆面なしに応対にお出かけなすった」
皆々笑っていると、
「ドーレ」
安藤の太い声、ややあって女の優しい声で、
「あの手前は和田の宇津木文之丞が妹にござりまする、竜之助様にお目通りを願いとう存じまして」
「ハ、左様でござるか」
姿は見えないけれども、安藤がしゃちほこばった様子が手に取るようです。
「その若先生はな」いよいよ安藤は四角ばって、
「ただいま御不在でござるが」
「竜之助様はお留守」
女はハタと当惑したらしく、
「左様ならば何時頃お帰りでございましょうか」
「さればさ、うちの若先生のことでござるから、何時帰るとお請合も致し兼ぬるで……」
「遅くとも今宵はお帰りでございましょう」
「それがその、今申す通り何時帰るとお請合を致し兼ぬるが、次第によりては拙者共御用向を承り置きまして」
安藤と来客の若い婦人との問答を道場の連中は面白がって洩れ聞いておりましたが、
「若先生に直談判というて美しい女子が乗込んで来た、前代未

聞の道場荒し」
「見届けて参りましょうか」
自ら薦めて斥候の役を承ろうとする者がある。
「賛成々々、裏口から廻って見て参られい」
ますます御苦労様な話で、間もなくあたふたと走せ戻って、
「見届けて参りました、確かに見届けて参りました」
息を切っての御注進です。
「どのような女子じゃ」
「あれは和田の宇津木文之丞様の奥様でござりまする、しかも評判の美人で……」
「ナニ、和田の宇津木の細君か、最前妹だというたではないか」
「いいえ、お妹御ではございませぬ、まだ内縁でございまして甲州の八幡村からついこの間御越しのお方、発明で、美人で里がお金持で評判もの、私は、八幡におりました時分から、篤とお見かけ申しました」
「文之丞の細君が何故に妹と名乗って当家の若先生を訪ねて来たか、それが解せぬ」
「あ、若先生のお帰り」
無駄口がパタリとやんで、見れば門をサッサッと歩み入る人は、思いきや、一昨日、大菩薩の上で巡礼を斬った武士——しかも、なりもふりもその時のままで。

五

竜之助の前には、宇津木の妹という、島田に振袖を着て、緋縮緬の間着、鶸色繻子の帯、引締まった着こなしで、年は十八九の、やや才気ばしった美人が、しおらしげに坐っています。
「お浜どのとやら、御用の筋は？」
竜之助の問いかけたのを待って、
「今日、兄をさし置き折入ってお願いに上りましたは」
歳にはませた口上ぶりで、
「外でもございませぬ、五日の日の御岳山の大試合のことにつきまして……」
竜之助も今帰って、その組状を見たばかりのところでした、そうして机の上に置かれた長い奉書の紙に眼を落すと、女は言葉を継いで、
「その儀につきまして、兄は悉く心を痛め、食も咽へは通らず、夜も眠られぬ有様でございまする故、妹として見るに忍びませぬ」
「大事の試合なれば、そのお心づかいも御尤もに存じ申す、我等とても油断なく」
素気なき答え方、女は少し焦き込んで、
「いえいえ、兄は到底あなた様の敵ではございませぬ、同じ逸見の道場で腕を磨いたとは申せ、竜之助殿と我等とは段違いと、常々兄も申しておりまする。人もあろうに、そのあなた様に晴れのお相手とは何たること、兄の身が不憫でなりませぬ」
「これは早まったお言葉、逸見先生の道場にて我等如きは破門同様の身の上なれど、文之丞殿は師の覚えめでたく、甲源一刀流の正統はこの人に伝わるべしとさえ望みをかけらるるに」
「人がなんと申しましょうとも、兄は貴方様の太刀先に刃向う腕はないと、このように申し切っておりまする」
「それは御謙遜でござろう」
竜之助は木彫の像を置いたようにキチンと坐って、面の筋一つ

動かさず、色は例の通り蒼白い位で、一言物を言っては直に唇を固く結んでしまいます。女は漸く躍起となるような調子で、頬にも紅がさし、眼も少しかがやいて来たが、

「もしもこの度の試合に恥辱を取りますれば、兄の身は元より、宇津木一家の破滅でございまする、ここを汲み分けて今年限り兄が身をお立て下さるよう、貴方様のお情けに縋りたく、これまで推参致しました、何卒兄の身をお立て下されまして」

女は涙をはらりと落して、竜之助の前にがっくりと結立ての髪を揺がしての歎願です。

竜之助は眼を落して、しばらく女の姿を瞶めておりましたが、

「これはまた大仰な、試合は真剣の争いにあらず、勝負は時の運なれば、勝ったりとて負けたりとて、恥でも誉でもござるまい、まして一家の破滅などとは合点なり難き」

冷やかな返事です。

女が再び面をあげた時、涙に輝いた眼と、情に熱した頬とは、一方ならぬ色香を添えつ、

「何も彼も打明けて申し上げますれば、兄はこの度の試合済み次第に、さる諸侯へ指南役に召抱えらるる約束定まり、なおその時には婚礼の儀も兼ねて披露を致す心組でおりましたところ……」

「それは重ねがさね慶たきこと、左様ならばなお以て試合に充分の腕をお示しあらば、出世のためにも縁談にも、この上なき誉を添ゆるものではござらぬか」

「それが折悪しく……いや時も時とて貴方様のお相手に割当てられ、勝ちたいにもその望みはなく、逃げましてはなお以て面目立ちませぬ、ただ願うところは貴方様のお慈悲、武士の情にて勝負をお預かり置き下さらば生々の御恩に存じまする。兄のため、宇津木一家のために、差出がましくも折入ってのお願いでございまする」

この女の言うことが誠ならば、いじらしいところがあります。兄のため、家のためを思うて、女の一心でこれまで説きに来たものとあれば、その心根に対しても、武士道の情とやらで、花を持たして帰すべきはずの竜之助の立場でありましょう、ところが、蒼白い面がいよいよ蒼白く見えるばかりで、

「お浜どのとやら、そなた様を文之丞殿お妹御と知るは今日が初めながら、兄を思い家を思う御心底感じ入りました。されど、武道の試合はまた格別」

格別！　と言い切って、口をまた固く結んだその余音が何物を以ても動かせない強さに響きましたので、今更に女は狼狽して、

「左様ならば、あのお聞入れは……」

声もはずむのを、竜之助は物の数ともせぬらしく、

「剣を取って向う時は、親もなく子もなく、弟子も師匠もない、熟魂の友達とても、試合とあらば不倶戴天の敵と心得て立合う、それがこの竜之助の武道の覚悟でござる」

竜之助はこういう一刻なことを平気で言ってのける、これは今日に限ったことではない、常々この覚悟で稽古もし試合もしているのですから、竜之助に取っては、あたり前の言葉をあたり前に言い出したに過ぎないが、女は戦慄するほどに怖れたので、

「それはあまりお強い、人情知らずと申すもの……」

涙をたたえた怨みの眼に、凝とお浜は竜之助の面を見やります。

竜之助の細くて底に白い光のある眼に打つかった時に、蒼白かった竜之助の顔にパッと一抹の血が通うと見えましたが、それ

も束の間で元の通り蒼白い色に戻ると膝を少し進めて、
「これお浜どの、人情知らずとは近ごろ意外の御一言、物に譬うれば我等が武術の道は女の操と同じこと、たとえ親兄弟のためなりとて操を破るは女の道でござるまい。如何なる人の頼みを受くるとも勝負を譲るは武術の道に欠けたること」
「それとても親兄弟の生命にかかわる時は……」
「その時には女の操を破ってよいか」

六

宇津木の妹を送り出したのは夕陽が御岳山の裏に落ちた時分です。しばらくして竜之助の姿を、万年橋の下、多摩川の岸の水車小屋の前で見ることが出来ました。
「与八！　与八！」
夜は水車が廻りません、中はひっそりとして鼠の逃げる音。微かな燈火の光。
「誰だい」
間だるい返事。
「竜之助だ、ここをあけろ」
「へえ、今……」
やや狼狽の体、やがて中からガラリと戸が開かれると、面は子供のようで、形は牛のように肥った若者です。
「与八、お前に少し頼みがあって、お前の力を借りに来た」
「へえ」
この若者は、竜之助を見ると竦んでしまうのが癖です。
「与八、お前は力があるな、もっとこっちへ寄れ」
耳に口をつけて何をか囁くと、与八は慄え上がって返事が出来ない。
「いやか」
「だって若先生」
「否か――」
竜之助から圧迫されて、
「だって若先生」
与八は歯の根が合わない。
「俺をお斬りなさる気かえ」
「否か――」
「行きます」
「行くか」
「行きます」
「よし、ここに縄もある、手拭もある、しっかりやれ、やりそこなうな」

七

竜之助の父弾正が江戸から帰る時に、青梅近くの山林の中で子供の泣き声がするから、伴の者に拾わせて見ると丸々と肥った当歳児であった、それを抱き帰って養い育てたのがすなわち今日の与八であります。与八という名もその時につけられたのですが、物心を覚えた頃になって、村の子供に「拾いっ子、拾いっ子」と言って苛められるのを辛がって、この水車小屋へばかり遊びに来ました。その時分、水車番には老人が一人いた、与八はその老人が死んだ時はたしか十二三で、そのあとを嗣いで水車番になったのです。
与八の取柄といっては馬鹿正直と馬鹿力です。与八の力は十二三から漸く現われてきて十五になった時は大人の三人前の力を易々と出します。十八になった今日では与八の力は底が知れないといわれている。荷車が道路へメリ込んだ時、筏が巌と巌との間へはさまった時、そういう時が与八の天下で、直様人が飛

んで来ます。
「与八、米の飯を食わせるから手を貸してくれやい」
「うん」
そして、大八車でも杉の大筏でもひとたび与八が手をかければ、苦もなく解放される。お礼心に銭などを出しても与八は有難がらない、米の飯を食わせれば、限りなく悦ぶ、それに鮭の切身でもつけてやろうものなら一かたげに三升ぐらいはペロリと平げてしまいます。米の飯を食わせなくても、与八がそんなに不平を言わないのは、小屋へ帰れば麦の飯と焼餅とを腹一杯食い得る自信を持っているからであるが、ずるい奴が、米の飯を食わせる食わせるといって散々与八の力を借りた上、米の飯を食わせずに済まそうとする、二度三度重なると与八は怒って、もう頼みに行っても出て来ない、その時は前祝いに米の飯を食わせると、前のことは忘れてよく力を貸します。
与八が村へ出るのをいやがるのは、前申す通り子供らがヨッパだの拾いっ子だの言って、与八が通るのを見かけていじめるからです。それで水車小屋の中にのみ引込んでいるが、感心なことには毎朝欠かさず主人弾正の御機嫌伺いに行きます。
「大先生の御機嫌はいいのかい」
女中や雇男が、
「あゝ好いよ」
と答えると、にっこりして帰ってしまう。竜之助の父弾正は老年の上、中気をわずらって永らく床に就いています。
竜之助から脅迫されて与八が出て行くと、間もなく万年橋の上から提灯が一つ、巴のように舞って谷底に落ちてゆく。暫らくして与八は、一人の女を荒々しく横抱にして、ハッハッと大息を吐いて、竜之助の前に立っています。与八に抱えられている女は、さっき兄のためと言って竜之助を説きに来た宇津木のお浜であります。
それからまた程経て、河沿いの間道を、たった一人で竜之助が帰る時分に月が出ました。
竜之助が万年橋の詰のところまで来かかると、ふと摺違ったのが六郷下りの筏師とも見える、旅の装いをした男で、振分の荷を肩に、何か鼻歌をうたいながらやって来ましたが、竜之助の姿を見て、ちょっと驚いた風で、やがて丁寧に頭を下げて、
「静かな晩景でござりやす」
竜之助はやり過ごした旅人を見送っていたが、
「少し待て」
「へい」
「お前はどこから来た」
「へい、氷川の方から」
「氷川、氷川の何というものだ、名は……」
「へい、七兵衛と申します筏師で」
「待て、待てと申すに」
「何ぞ御用で……」
立ち止まるかと思うと彼の男は身を翻して逃げようとするのを、竜之助は脇差に手をかけて手練の抜打。
侮り切って刀へは手をかけず、脇差の抜打で払った刃先をどう潜ったか、旅の男は飛鳥の如く逃げて行きます。竜之助は自分の腕を信じ過ぎた形になって、切り損じた瞬間に呆然と、逃げ行く人影を瞶めて立っている。
早いこと、早いこと、飛鳥といおうか、弾丸といおうか、四十八間ある万年橋の上を一足に飛び越えたか、その男の身体は丸

で宙にあるので、竜之助はその迅さにもまた気を抜かれて、追いかけることをも忘れてしまった程でした。
脇差の切先を調べて見ると肉には触れている、橋の上をよくよく見ると血の滴りが小指で捺したほどずつ筋を引いてこぼれております。竜之助は右の男を斬り殺そうとまでは思わなかったが、斬ろうと思うた程度よりも斬り得なかったことが、よほど心外であるらしく、歯咬みをして我が家の方をさして行くと、邸のあたりが非常に混雑して提灯が右往左往に飛びます。
「あ、若先生、大変でございます、賊が入りました」
「賊が――」
邸の中へ入って調べて見ると、この時の盗難が金子三百両と秘蔵の藤四郎一口。
「届けるには及ばぬ、このことを世間へ披露するな」
何故か竜之助は家の者に口留をします。

八

宇津木文之丞が妹と称して沢井の道場へ出向いたお浜は、実は妹ではなく、甲州八幡村のさる家柄の娘で、文之丞が内縁の妻であることは道場の人々が予め察しの通りであります。
お浜は才気の勝った女で、八幡村にある時は、家のことは自分が切って廻し、村のことにも口を出し、お嬢様お嬢様と立てられていたその癖があって、宇津木へ縁づいてまだ表向きでないうちから、モウこんな策略を以て良人の急を救わんと試みたわけです。
宇津木の家は代々の千人同心で、山林田畑の産も相当あって、その上に、川を隔てて沢井の道場と双び立つほどの剣術の道場を開いております。
竜之助の剣術ぶりは、形の如く悪辣で、文之丞が門弟への扱いぶりは柔かい、その世間体の評判は竜之助よりずっと宜しい。お浜もそれやこれやの評判に聞き惚れたのが、ここへ来た最も有力なる縁の一つであったが、実際の腕は文之丞が到底竜之助の敵でないことを玄人の中の評判に聞いて、お浜の気象では納まり切れずにいたところを、このたび御岳山上の試合の組合せとなって見ると、文之丞の悲観、歎息ははたの見る目も歯痒いのであります。お浜は焦れて堪りませんでしたが、それでも良人の危急を見過ごしが出来ないで、われから狂言を組んで机竜之助に妥協の申し入れに行ったのが前申す如き順序であります。
その晩、お浜は口惜しくて口惜しくて、寝ても寝就かれません。
憎い憎い竜之助。歯痒い歯痒い我が夫、この二つが一緒になって、頭の中は無茶苦茶に乱れます。竜之助と文之丞とは、お浜の頭の中で卍となり巴となって入り乱れておりますが、ここでもやはり勝目は竜之助にあって、憎い憎いと思いつつも、その憎さは勝ち誇った男らしい憎さで、その憎さが強くなるほど我が夫の意気地のなさが浮いて出て、お浜のような気の勝った女にはたまらない業腹です。
縁を結ぶ前には、門弟は千人からあって、腕前は甲源一刀流の第一で、どうしてこうしてと、それが何のざま、さんざん腹を立てても、やっぱり帰するところは、我が夫の意気地のないということに帰着してどうしても夫を下げすむ心が起って来ます。夫を下げすむと、どうしてもまた憎いものの竜之助の男ぶりが上って来ます。妻として夫を侮る心の起ったほど不幸なことはない。
もしも自分が強い方の人であったならば、どの位気強く、肩身も広かろう。武術の勝負と女の操。竜之助のかけた謎がガンと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com